

「お母^かん！ボク、頑張^{がんば}るよ！」

小松義邦

私が生まれたのは昭和8年（1933）6月で、歴史年表をたどりますとこの年の3月に死者3,008人を出した「三陸大津波^{さんりくおおつなみ}」がありました。社会全般^{ぜんぱん}には「昭和恐慌^{きょうこう}」といわれる不況^{ふきょう}の波^おが押し寄せたのち、徐々に回復^{じょじょ}の兆^{きざ}しが見え始めた時期でもありました。

日本政府は不況脱出^{ふきょうだっしゅつ}を図るための活路を中国大陸に求め、国内の貧困農民^{ひんこん}に大陸移住^{すず}を勧めるなどの対外政策^おを押し進めました。そのため、当時の清国政府瓦解^{しんこく がかい}の跡目争い^{あとめあらそ}をしていた国民軍と中国共産党軍が手を結んで抗日戦線を展開するようになりました。その結果、日本とは比べものにならないほど大きな中国大陸の中で戦線が拡大し、次々と軍隊を増やさなければならないという誤った国力増強の道^{みち}を突き進むようになっていきました。

そのような時代の中で、私の父と母は青春^{むか}を迎え、父が24歳^{さい}、母が18歳^{さい}の時に私が生まれました。当時の年令は「数え年」でしたから現在の呼び方では23歳^{さい}と17歳^{さい}の新婚家庭^{しんこん}でした。

私の故郷は大阪府の西の兵庫県で、父は県央の播磨新宮町^{はりましんぐう}（現た

つの市)、母は県南の岩屋町(現淡路市)の生まれでした。昭和4年に始まった恐慌の只中で生きる糧を求めて大阪の街で出会い、結ばれて街の片すみに所帯を持った若い夫婦の幸せは長く続けさせてはもらえませんでした。

結婚して間もなく生まれた私が4歳になった時、28歳の父のもとに「召集令状」が届き、陸軍歩兵上等兵として大陸に送り出されることになりました。昭和13年、支那事変の最中の出来事でした。母が22歳で、新しい命を宿したときでもありました。

どのような言葉が交わされ、どのような涙が流されたのかは知る由もありませんが、わずか4年の新家庭を襲った非情な徴兵制度の「赤紙」を前にして、若い夫婦は出発までの短い名残りの時を震えながら過ごしたに違いありません。とは言え、外に向かつては「お国のために」勇んで出征兵士を送る駅頭に笑顔で立ったのではないかと思います。

翌年生まれた子供の顔を見ることもなく、父は2年後に大陸の土となりました。残された母や私と妹は父の実家に身を寄せましたが、家長制度と男尊女卑のしがらみの中では長く暮らすことができませんでした。

母は淡路島^{あわじしま}の実家に私たち兄妹を連れて帰りました。貧しい漁師町の生活でしたが暖^{あた}かい祖父母の慈^{いつく}しみを受けて私は小学生になりました。翌年の16年には太平洋戦争に突入し、国民生活はだんだんと困窮^{こんきゅう}するようになりました。女手で2人の子供を養っていけるような時代ではなくなりました。

母が2人の子供を連れて再婚する決意を固めたのは28歳の年のことでした。お国のために名誉^{めいよ}の戦死^とを遂げた「軍国の妻」が再婚するなど許されないという考えの小松家から猛^{もう}反対があったようですが、女性の職場が容易に見つからない時代に、子供2人を抱えた耐乏^{たいぼう}生活にも限りがあったと思います。

再婚相手にも2人の子供がいて、長男は外に出ており、長女はまだ小学生でした。義父と母と妹2人に私を合わせた家族5人の生活は子供心にも楽しく、間もなく生まれた妹も加えてますますにぎやかに楽しくなった私の幸せはその時が頂上でした。

民法の基本に置かれた「家」中心の慣習に照らし、新宮の祖父から私に対し小松家の跡取り^{あとと}としての呼び戻しがありました。母はもちろんのこと義父も必死に頼んでくれましたが、亡父も一人っ子であった小松家にとって私は必要とされたので、弁護士を通した話に

母も畳^{たたみ}を叩^{たた}いて泣いていました。妹は女の子だからということで母の手元に残してもらえたことが、母や妹にとって何よりのことであつたと思います。

私が10歳^{さい}の小学校4年生の夏休みに母や妹たち、それに優しくあつた母方のじいちゃんや腰^{こし}の曲がったばあちゃんたちと別れる日があつてきました。淡路島^{あわじしま}から対岸の明石までは4キロメートルで、現在では3,911メートルの「明石海峡大橋」^かが架かっていますが、当時は1時間に1本の小型定期船が頼りの時代でした。

前夜来の赤い目をした母にしっかりと手を握られ、「義邦^{よしくに}、一緒にいてやれずにかんにんやで、向こうへ行ったら可愛がってもらうんやで。身体に気を付けてな…」と何度も何度も言われ、祖父母や妹たちと、暖^{あたた}かくたくましい義父の手の温もりを受けて船に乗り移り、やがて別れの実感が胸に込み上げてきた時ボーッと出航の汽笛が鳴りました。

「お母ん！ボク、頑張^{がんば}るよ！」とただそれだけしか言えずに手を振ってから、70年の歳月^{さいげつ}が過ぎました。

戦争という大波の中で、どれほど多くの人たちの血や涙が流されたか知りませんが、小さな家庭の小さな子供のお話でした。